

## 親・教師と「道德」

20世紀フランス最大の詩人であり文明評論家であるポール・ヴァレリーの“語録”に拠ると、同じくフランス最高の詩人であり、大正末年に駐日大使を勤めたポール・クロードルが日本人を評して「彼らは貧しい。然し高貴である」とヴァレリーに語ったと言ふのです。当時の日本人は既に墮落してゐたと思ひますが、それでもまだフランスの詩人の眼には日本人が高貴に見えたのです。然し、彼がまだ生きてゐて今の日本人を觀たら「日本人は富んでゐる。然し、心は貧しい」と評するに違ひありません。

ここで断つて置きますが、私は決して“清貧”を理想とするものではありません。金銭は貴重な物だと思つてゐます。ただ同じ金銭でも、品性の高潔な人の使ふ金銭は高い価値のある働きをするのに対し、品性の下劣な人の使ふ金銭は全く価値が無いのです。つまり、金銭そのものに価値があるのでは無く、その使ひ方によって価値が大きくも小さくもなる、といふ事なのです。

だから、二宮尊徳翁は「世の道德を説く者は金銭を軽んじ、經濟を説く者は道德を軽んず。いづれも過ちなり」と断じ、明治の大実業家、渋沢栄一翁はこれを受けて「右手に論語、左手に算盤そろばん」と言って“論語と

算盤説”を奨めたのです。今でも立派な実業家は皆“道德”と“經濟”とを共に尊重してゐますが、世の人の多くは口に道德の重要な事を説くだけであって、実際にはこれを軽んじてゐるのです。かういふ親たちの姿を見て育つ今の子供たちは、家庭や学校でどんなに道德を重んずる事の大切さを教へられても、それは“建て前”であつて、本当は無視して差し支への無いものである、といふ風に解釈するものです。なぜなら、子供たちには親や教師の行為がよく見えるので、その口にする事と行ふ所とが一致してゐない事がよく判るからです。このやうな状況においては、いくら道德を説いても害が有るだけで何の益も無いでせう。そもそも道德といふものは説くものでは無く、実践して見せるものなのです。教へるものでは無く、感得させるものなのです。